
リリカルなのはA ' S ~ RIGHT OF LEFT (去り行く者達の権利) ~

夜真紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのはA'S ～RIGHT OF LEFT（去り行く者達の権利）～

【Nコード】

N2410K

【作者名】

夜真紅

【あらすじ】

L計画——竜宮島をフェストウム（シリコン型生命体）から遠ざけるための陽動作戦として立ち上げられた危機回避プログラム。竜宮島を守る為に自分達が囷として二ヶ月間戦い続けた若者達。・・・その激戦で散って逝った若者達の新たな物語。

これはリリカルなのはA'S

Sと蒼穹のファフナー ～RIGHT OF LEFT～のクロスオーバー作です。 まだまだ

初心者な者ですので自己解釈しています。

脱字・誤字なども度々あります。

どうか温かい目で見守っていて下さい

作品が分からないのでしたらwikiやアニメを参照して見て下さい。

零話 「プロローグ」(前書き)

初めまして、夜真紅^{やまこ}です。

初心者ですので色々とアドバイスを頂けると幸いです。

自己満足で更新も不安定になってしまつてしょうがどうか末長く見守って下さい。

それではどうぞ、読んで下さい。

零話 【プロローグ】

そこは蒼色に覆われていた。

深くて暗い海の底。

日光ですら届かず、ただ静寂だが全てを支配していた。

あるのは波という風

あるのは祝福というマリンスノー

降り続くマリンスノーが一面を覆い隠し、海底に降り積もり海の中とは思えない程に幻想的な光景が広がっていた。

そんな降り積もる中に2体の巨人が存在していた。

その巨人の身体はマリンスノーによって全身に白色に覆われているが隙間からは所々に紅色が垣間見え、そこからは無数の傷痕があり、激しい戦闘があった事が窺える。降り積もっていない関節は灰色で塗られている事が容易に見える事が出来る。

その巨人の名は『ティターン』

通称『ファフナー』と呼ばれフェストウム（シリコン型生命体）と闘う為に造られた人型兵器。

そのうちの一体の機体の中にいるパイロットである将^{まさ}陵^{おか} 僚^{りょう}は今

レコードテープを使って録音を行っていた。

伝えているのは自分達の60日間の戦い。

・・・自分達が居たと言っ証。

「——以上が俺達が戦ってきた歴史だ」

今までの思いを振り返るように彼は閉じていた双眼をゆっくりと開いた。

「これを聴いてくれる奴がいる事を…願っている…」

その目からは諦念と頑固たる意志が映し出されていた。

「（これで島の皆に恩返し出来たかな…）」

思い出すのは自分に居場所をくれた島の住民達。

帰る場所が在るからこそ自分はここまで戦うことが出来たのだから…。

目の前の映っているタイマーフェンリル発動時間がゆっくりと近いて行く…

後はただ時を待つだけ……

——残り時間 1分

遼はもう一体のティターンに目を向ける。

その機体は横倒れおり、装甲の上に降り積もるマリンスノーによって埋めつくられ、長時間動いていないことが窺える。

何故ならその機体の中にはパイロットがもう居ないのだから……もう彼女を感じないから……裕未という存在を。

走馬灯のように彼女との記憶が蘇る。好きだった人が死ぬという喪失感が今でも消える事はない。

裕未の事を思い出すにつれて自然と涙が溢れ出て来る。

「——っ!？」

突然左腕から違和感が生じる。

違和感があつた所を見てみるとそこから翠色の結晶が僚の皮膚を突き破つて体内から出て来ていた。

肉体の結晶化——急激に全身が緑色の結晶鉱物に覆われた後に、粉々に崩壊する。それはいわゆる死。

将陵 僚は生まれた時から肝臓に病気を抱えており、幼い時から体調が優れず、死ぬことに対する恐怖や悲しみを抱いていた。

だが自然と死ぬことが怖くなかった。

それが何故かは解らない。

昔から死ぬ事が怖かったのがいざと為つたら平然としている。そんな自分に苦笑してしまう。

——30、29、——……

突如僚の目の前から光が差し込む。

不意の光に目を細めながら顔を上げる。目に映っているのは黄金色に輝く人型の姿をした今まで何度も戦つて来た敵——フェストウムが目の前に居た。

初めて見る姿をしていた。その姿は天使を連想させる姿だった。

その姿にまた美しいと不意に思ってしまう……

海に入る事が出来なかった筈なのに今平然とそこに居る。それは

きつと――

――25、24、23、――…

「お前が海に入れなかったのは代謝出来ずに結晶化するからなんだ
つてな・・・」

- - -19、18、17・・・

「代謝って・・・体を生まれ変わらせるってことだよな・・・」

フェストウムが静かに遼に近づいていく。

――13、12、11・・・

「お前達もそれを手に入れた・・・」

—、9、8、7、—…

「……それって、命になるって事だろ…」

—1、0———

『——フェンリル起動』

ファフナーに搭載されたフェンリルが発動されファフナーとフェストウムは光に包まれ、爆風・津波が吹き荒れた……。

……『あなたはそこにいますか……』

その言葉だけが海底に響いた。

零話 【プロローグ】（後書き）

どうだったでしょうか・・・。

なんか、頭では分かっているんですがどうも文章にするのが難しい過ぎです・・・。

納得できる文章が出来ないよ。。。。

一話 【出会い】

～第97世界 日本 海鳴市～

。 やつと病院の検査も終わったな。今日は随分と長かったけど・・・

期待してへんけど一応足の状況を聞いてみてもやっぱりあんまり薬の効果は出てないらしく石田先生は難しい顔してたけど、もう何年間付き添ってきたこの足も今は全然気にせんようになったし、なんかここまできたら治る気がせんのよね～。まあ治療は続けんと石田先生に申し訳ないしね。

。 やっぱり自分の身体の事は自分が良く知ってるって事なんかな・・・？

「今日はまた図書館で本を借りて買い物して帰ろうかな？」

と呟きながら車椅子で病院からでる途中におじさんやおばあちゃん達が話し掛けて来てくれる。

長い間通院しているとやっぱり仲良くなるもので優しく接してくれる。おばあちゃん達だけでなく子供達もうちに懐いてきてくれて今ではこの病院もうちの大切な場所です。

図書館で本を借りて晩御飯の材料を買った帰りに双子の猫に会った。

昔からよくこの猫達見かけるな。と思いながらこの子達用買っていた缶詰を開いて地面に置く。

うちをじつと見ながらそそくさと何処かに行ってしまった。

「（あの猫達にはいつまでも懐かな〜・・・）」

悲しく地面に置かれている缶詰は猫の溜り場に置いた。

ビックリしたわ〜・・・缶詰置いた瞬間一斉に飛んでくるんやもん。

危くウチまで喰われるとこやったわ・・・

家に帰れたものの、もう暗くなってもうとるし早速晩御飯作らないとな。

今日は最近とあるゲームで出てきたマーボーカー・・・

・・・ドサツ・・・

・・・ん？なんか落ちた音がしたんやけど・・・庭からかな？

窓を開けてみると何かが落ちていた。何か大きいな〜・・・
ん〜暗くてよく見えへん・・・。あ、携帯の明かりで・・・。
携帯を開いて落ちてきたものを照らしてみると・・・

「・・・え、ええ人？なんか・・・？」

人が倒れていた。力なくただ死んだ様にうつ伏せに倒れていた。

目の前で人が倒れているという出来事にはやての頭は真っ白になった。
った。

・・・とりあえず深呼吸をした。・・・うん、落ち着いた。

「まずは警S・・・病院に電話せな！」

落ち着け！落ちる毛！？ウチは出来る子や！

石田先生に連絡してすぐに運んでくれるそうだ。

病院からここまでそこまで遠くないからすぐ来てくれる。

今は自分に出来る事をせな！

近づいてうつ伏せの身体を反してみると倒れていた人が男の人だと分かった。

うん、呼吸はちゃんとしてるな・・・

変わった服を着ていた。ボディースーツかな？所々が破けていた。怪我をしていないか体中を調べていたら手に痛みが走った。

「な、んなん・・・これ・・・」

痛みが走った所を見るとそこにはサファイアのような結晶が左腕から突き出ていた。

一つだけではない。いくつもの結晶が彼の体中から無数に突き出てくる。

血が出ることもなく、まるで身体そのものが結晶化する様に・・・

左腕から腹、太もも・・・様々な部分から僚を蝕んでいく。

「・・・止まって・・・止まって、や・・・」

はやては結晶を両手で抑え付けた。これ以上彼が侵蝕を止されるのを止める為に。

はやても直感で分かってしまった。死を目の前した人を見たこと

があるはやてには・・・

・
この結晶が綺麗なものではなく、恐ろしいものであると言つ事に

・
だが結晶ははやての意思に反して止まる事無く少しずつ遼を蝕んでいく。

「・・・っぐ!？」

結晶を抑えていた手に新たな結晶が突き刺さる。
肉に食い込み血が漏れ出してくる。だがはやてはそんなことを気にせずただに彼を助ける為に必死に両手で結晶を抑えつけた。

「・・・やだ!お願いやから、……………止まってええええええええ!
え!」

力一杯にはやては叫んだ。

・
もう目の前で人に死ぬのを見たくないから。ただ単に怖かった・

- - - ドクンッ！

「・・・ッ！？」

突如はやての胸の中が熱くなった。

何かが込み上げてくるかの様に・・・身体中が熱くなり始めた。

・・・温かった。何かに包まれているかのようで。

さらに白銀の光が胸の中から出てくる。

光が遼の中に入っていく。

それと同時に脱力感と疲労感がはやてを襲った。

瞼が重くなり始め、意識が朦朧とし始めた。

「（駄目や！この人を助けんと・・・！）」

必死に意識を保ちつつ再びはやては結晶を抑え付けようとしたが手止まった。

結晶をみると結晶は彼を侵蝕せず止まっていた。

「（なんかよく解らんけど、良かった……）」

そしてはやては意識を手放した。

一話 【出会い】（後書き）

どうだったでしょうか？

キャラの思考が全然分らない！

プロットも完全でないし・・・

これからどうしようか・・・

二話 【病院で・・・】

～海鳴病院～

「・・・え？」

僚はベットの上で目を覚ます。

太陽の日差しで顔をしかめながらも辺りを見わたす。

自分の腕には点滴がされていて回りには誰もいなかった。

「（・・・なんで俺は生きているんだ・・・確かに俺は海底でフ
エンリルを起動させて死んだはずなのに。それに同化現象で俺はも
う結晶化してるはずでー）」

記憶を整理しながら僚は自分の身体を診てみる。

結果どこも異常がなくそれどころか前まであった結晶まで消えて
いるのに僚は驚く。

「（どうなっているんだ・・・？）」

僚はベットから出ようとするすると足がふらつき、力抜けそうになるが点滴を支えにして病室から出る。

「あ、お兄さん、まだ寝とかんといけんよ」

不意に背後から声が掛かる。

振り向くとそこには車椅子に乗った小学生ぐらいの少女。八神はやてがいた。

「ほら、はよぐ部屋に戻って寝といて下さい！」

「え・・・？ああ・・・」

「先生を呼んできますんで、ちょっと待つといて下さいね」

見知らぬ少女に注意されて僚は流されるように部屋に入れられた。はやては先生を呼びにどこかにいつてしまった。しょうがなくベットの上に座る僚。

「誰なんだ、あの子は・・・（もしここが竜宮島なら見覚えぐらいあるはずなんだが・・・ここは竜宮島じゃないのか？）」

そんなことを考えているとノックの音がした。

ドアから入ってくるのはさっき声をかけて来たはやてと白衣を着た女性が入ってきた。

「こんにちは、石田です。調子はどう？」

「まだあまり体を動かさないだけであとは大丈夫です」

「そう、それは良かったわ。この子があなたが倒れてるの見つてくれたのよ。礼ぐらいはしときなさい」

そう言われ僚が少女に近づく。

「こんにちは、八神はやてです」

「助けてくれて本当にありがとう。将陵 僚だ」

礼と自己紹介が済んだところで石田先生が真剣な顔つきで僚に問いかける。

「それでなんであなたははやてちゃんの庭で倒れてたの・・・？」

「・・・え？」

「はやてちゃんの話だと突然庭から物音がしたから行ってみたらあなたが倒れてたらしいけど・・・」

「・・・」

何故はやてちゃんの庭に自分が倒れていたのか。
予想外の話で混乱する僚だがさらに質問が出される。

「それにあなた財布に携帯も持っていない、指輪しか持っていないじゃない」

「指・・・輪？」

右手を見てみるとそこには銀製の指輪があった。
僚もこの指輪をつけた覚えはなかった。
何か刻み込まれているがよく分からなかった。

「だいたいねー」

気がつくと言問から説教に変わって言っている石田先生に僚はため息を吐く。

不意に石田の後ろにいたはやてに目を向けると苦笑しながらペンの紙に何かを書いていた。

書き終えたはやては書いていた表面を僚に向けると――

『私の話に合わせて下さい』

と書かれていた。僚が小さく頷く。

「ちょっと、僚君聞ってるの〜！」

「あ、はい!」

「なんではやてちゃん家で倒れてたの!？」

「・・・それは・・・」

自分も分らないと言いたいが、話がややこしくなるため口籠ってしまふ僚。

そんな遠にはやてが会話に割って入る。

「もしかしてグレアムおじさんの知り合いの方でしたか？」

「あ、ああ。そうだが・・・」

戸惑った僚だがはやての話を合わせてもらうことにした。

「ああ、やっぱり！石田先生この人グレアムおじさんの甥の人です。この前おじさんから手紙が来て私の誕生日を祝ってくれるそうなんです!」

「ああ、そうなんですよ・・・！」

「グレアムおじさんって、はやてちゃんがお世話になってる・・・」

うまく事情が分からない僚ははやてに任せることにした。

石田先生が悩んでいるとはやてがさらに追い討ちを掛ける。

「僚さんが私を驚かそうとしたんやけどそれをウチが本気にしてしもつて・・・」

「はい、そうなんです！」

「ホンマすいませんが、今回は大目に見てもらえませんか・・・？」

はやての申し訳ない顔を見た石田先生は諦めたようにため息を吐く。

「・・・仕方ないわね。はやてちゃんと頼みだしね。僚君今度からこういうことがないようにね！」

「はい・・・すみません」

「それじゃ、最後に検査したいから少ししたら私のところに来て頂戴」

「はい、分かりました」

石田先生は病室から出て行った。

一息ついたところで僚がはやてに礼を言う。

「気にせんで下さい。困った時はお互い様です」

「それでここはどなんだ・・・？竜宮島なのか？」

「竜宮島？聞いたことありませんね・・・」

「！・・・なら、ここはなんという国なんだ？」

「え、日本に決まってるじゃないですか」

面白い人やねと笑っている爆笑しているはやてに対して僚はただ
啞然としていた。

何故なら僚が知っている『日本』はもうなくなっているからだ・

二話 【病院で・・・】（後書き）

いかがだったでしょうか・・・？

話がうまくまとまりません・・・（涙）

どうかこんな僕にアドバイスを！

そして励ましの言葉をバンバン下さいまし！！

三話 【病院で・・・】その2

（海鳴大学病院）

僚は今パソコンでこの世界の歴史について調べている。
はやてに日本です宣言をされて本当にここが知っている『日本』
なのか。過去か未来か。

それとも竜宮島のように平和を偽っているのか。
人類軍、フェストウム・・・竜宮島。
色々な思いな入り混じりながら僚はキーボードをひたすら打つ。

「・・・・・・・・」

調べてみて三時間ぐらいしただろうか。時計をみると一時を
過ぎていた。

調べていくごとに色々と分かってきた。
まず世界の組織名、団体名が違ふこと。

僚がいた世界は西暦は2145年なのだがここは西暦2005年
であること。

ここが過去であると思いきや歴史についても極似しているが抜け
ている部分があり、どう判断すればいいのか迷っていた。

「（俺の世界も昔はこうだったのかな・・・）」

老人達の雑談や子供達が戯れる^{たわむ}声、穏やかな空間はまさに平和そのものだあった。

「調べもの終わりました〜？」

「ああ、今終わったところだ。どうしたんだ？」

「いや、一緒にご飯食べようと思って」

そういえばもう昼飯かと僚が気づくと不意にお腹が鳴ってしまふ。はやては必死に笑いを抑えようとしながら食堂に案内してもらった。

昼過ぎであるから席は充分空いておりなんなく二人分の席を確保することが出来た。

「はやてちゃん、本当に俺が庭に倒れてたのか？」

「うん、びつくりしたよ。物音がするから見に行ったら僚君が倒れてたんやもん」

オムライスを頬張りながら喋るはやてに対して僚は食事が止まる。

「・・・そのとき俺の体に異常がなかったか？」

「ん！あつたあつた。僚君の体から何か結晶が出てきてな大変だったんやから……」

「……………」

僚は改めて身体を触ってみてもどこも違和感がなかった。だが実際に肉体の結晶化は起こっていた。

急激に全身が緑色の結晶鉱物に覆われた後に、粉々に崩壊するこの現象は特別な処置をしない限り助からない。……それが何故自分には生きているのか。

それに実際に見たのだ。処置もできず仲間が結晶化し死んでいくのを……

その映像が甦り、胃から込み上げてくる物を必死に抑える。

「ちょっと、大丈夫ですか!？」

「大丈夫、大丈夫だから……」

どう見ても顔色が悪い僚にはやては取り合えず寝かしておき、石田先生を呼ぶことにした。

僚は担架で運ばれ今はベットの中で眠ってもらっている。

「石田先生……すいません……」

「なんではやてちゃんが謝るの?」

「だってウチが変なこと言わんかったらこんなことには・・・」

シユンと縮こまっているはやてに石田は苦笑しながらはやての頭を優しく撫でた。

驚いたはやては石田先生に顔を向ける。

「大丈夫よ、明日には僚君は元気になるでしょうしそんなに気を落とさないで・・・ね？」

「・・・はい」

「また明日いらっしやい。きっと僚君喜ぶから」

「はい！また来ます。ほな先生さよなら」

元気を取り戻したはやては手をブンブンを振りながら帰って行った。

夜。石田は廊下を歩いていた。

ゆつくりと彼女はある病室の前に止まる。

ノックをしても返事がないが石田はお構いなくドアを開ける。
そこにはベットのうちは団子の様にと膨らんでいた。

はぁ・・・と石田はため息をつきながらベットに近づく。

「僚君、起きてるんでしょう・・・」

「・・・」

返事が返ってこないが石田の顔は真剣そのものだった。

その姿を覗きながらみた僚は上半身を起き上がらせ石田先生と向き合う。

「・・・さあて、あなたのお話聞かせてもらおうよ・・・」

石田の悪戯っぽい笑みが印象的だった。

こうして波乱の一日が終わった。

三話 【病院で・・・】その2（後書き）

グダグダです・・・はい。

なぜかプロットど通りに話が進まないよ・・・（涙）

これからどうなるんでしょうか・・・自分でも分かんないや・・・

四話 【過去】

「今晚の夕食なんがええ？ 久々の客人やから豪華なもんにせんと
な！」

「・・・・・・・・」

満点の笑みを浮かべながらはやてはルンルンとステップするかの如く、車椅子をこぎながら買い物に行く準備を始めている。

一方、遼ははやての後ろ姿を見ながら深刻そうな顔をしながらもはやての買い物について行くのだった。

僚がこの世界に来て一週間ほどが経っていた、はやては毎日僚に会いに来ている。

この一週間は体調も快調で、体も異常が診られなかった。

はやてが石田先生に結晶のことを話していたために僚は石田に自分は他の世界からやって着たと説明する。普段なら信じない石田先生だがはやての話と僚の状態から、渋々ながら信じるようになった。

そして

戸籍も何もない僚をこのままにすることは出来なかった石田先生とはやてはある作戦に出る。

（診察室）

精密検査を終えた僚は椅子に座りながら石田先生から診断結果を言われるのを待っていた。

「やっぱり検査をしても貴方達の言っていた結晶物は体内からは発見できなかったわ」

「そうですか……。他に異常はありましたか？」

「いいえ、貴方の病気を除いたら健康体なんだけど……」

「病気の事は気にしないで下さい」

若干暗い表情をみせる石田に僚は苦笑してしまう。
今はこの病気のことよりも――

「僚君はこれからどうするの？」

「……………」

そこが問題だった。病氣も普通に生活していれば体調が悪い程度であり通院する程度であり、もうすぐ僚は退院してしまうのだ。お金もない僚にとって今一番深刻な問題だった。

「そこから私の提案なんだけど。はやてちゃんの家にお世話にならない？」

「それはさすがちょっと・・・」

いくらはやてと仲良くなったといってもいきなりのはやての家にお邪魔になるのは気が引ける僚。

「それにはやてちゃんの両親に自分はグレアムおじさんの甥っ子信じてくれるか・・・」

「そのことなんだけど・・・」

遼がはやての両親のことを切り出すと石田先生は深刻そうな表情を浮かべた。

いきなりの表情の変わりように遼は疑問が頭に浮んだ。

「－－－－はやてちゃんのご両親は亡くなってるの・・・」

「・・・え？」

石田の予想外の言葉に僚は思考が止まる。

あの明るくて、優しいくて幼い子供がそんな過去がある事。あつてほしくなかった思い出。

近くで話して笑顔を絶やさないとはやての顔を僚は思い出した。

はやての過去を知った僚にははやての笑顔は寂しさを隠すように見えた。

そんな僚を石田は顔色を見ながら話を続ける。

「はやてちゃんが幼い頃に交通事故でね・・・」

「それじゃあ、はやてちゃんはずっとー」

「そう、一人でずっと暮らしてきたのよ」

はやてが平日の昼間でも遼に会いに来ていた。

僚はそれは足の検査だと自己解釈をしてあえて聞いていなかった。

今思えば初めて会った日からこの一週間、はやては自分の事を一言も喋っていなかった。

いつも雑談、雑談・・・いくらでも話す時間があつたはずなのにはやては話さなかったのだ。

「幸い財産管理などは父親の知人のグレアムおじさんにやってくれてるそうよ。私もはやてちゃんも名前だけしか知らないけどね・・・。そのグレアムって人も家にいないの。だから少しでもいいか

らあの子を見てあげて。 私はこんな職だからはやてちゃんだけを
見てあげられない。 けど、あなたなら寂しさをなくせるんじゃない
いかと私は思ってるわ。 医者としてではなく、私個人のお願いで
・ ・ ・
」

「 ・ ・ ・ 分かりました。 俺なんかで良かったら、力になります」

僚は知っているから。

両親のいない寂しさ、孤独というものも ・ ・ ・
だけどそんな自分に色んな人が助けてくれた。
居場所をくれた。 だから今自分はここにいる。

だからはやてを知りたかった。
何故人に頼ろうとしないのか、孤独になり続けるのかを ・ ・ ・

四話 【過去】（後書き）

話が進んでいかなかったぜ・・・（汗）

色んな人の参考にしているんだが、自分には格が違い過ぎる・・・

友達にも協力してもらいながら今は頑張ってみます！

感想もどんどん募集してます！いや、下さい！

どうかアドバイスもしてくれると感激です！（涙）

五話 【過去】その2

くはやての家く

「綺麗にしてるな・・・」

と呟きながら僚ははやて家の居間に腰を下ろしていた。

はやてが一人暮らしと聞いて来たみたら、案外部屋も整頓していたし文句の付けようもなく完璧といえるぐらいに掃除されていた。

掃除、洗濯、料理。最低限これらが出来なければ一人暮らしはやっていけない。

十三歳から一人暮らしをしていた僚にとってもそれは中々大変なことだったし、慣れるのにも相当時間が掛かった。

だが足が不自由にもかかわらず幼い頃からそれをこなしているはやてに驚きながら僚は内心ほっとしていた。

「（何年もやっていればそうなるか・・・）」

「僚君、おまたせ」

不意に声がした方向を見てみるとそこにドアから顔を覗かせているはやてがいた。

しかし僚をみた途端、神妙な顔つきになる。

「どうしたん？ そんな顔して・・・」

「いや、ちゃんと掃除してるんだな〜って思っただけさ」

「それはええんやけど、あんまり顔色良くないで・・・？」

「・・・気のせいだよ。　　っと、買い物に行くぞ」

「あつちよつと、僚君！」

勘が鋭い子だなつと僚は思いながら、話を逸らすために強引にはやての車椅子を押しながら僚達は家を出た。

「っもう僚君は〜・・・」

「ごめん、ごめん・・・」

はやてに呆られながら僚は申し訳なく謝罪する。

ああするしか方法がなかったにしろはやてに迷惑を掛けてしまったことに若干の罪悪感が込み上げてくる。

「それでもう外に出てるってことは僚君はもう退院したん？」

「いや、まだだけでももうすぐ退院できるらしい」

それを聞いた途端はやての口が少しつり上がったのを僚は見逃さなかった。

はやてが僚に向ける笑顔が変わった気がした。

「退院したらうちん家に居候になるんよな？」

「・・・石田先生から聞いたのか？」

「他に誰がおるん？」

やっぱりか・・・と僚は頭を抱えてしまう。

そのことだけを教えるならまだいいのだ。どうせ言うことだったのだから・・・

僚が心配なのは石田先生が余計なことをはやてに教えているかなのだ。

結晶化という非日常的な出来事に会ってしまったはやてにはもう関わって欲しくはなかった。

だから――

「・・・石田先生からはやてちゃんの事を聞いた。両親のことも、一人暮らししていることも・・・」

「・・・まあ、当然聞くことになるやろうな」

はやても予想していたらしく苦笑する。

僚から見てもやっぱり誤魔化しの笑顔に見えてならなかった。

「実はな俺も両親はもういないんだ。 十一歳から一人暮らしをしていた・・・」

「ごめん・・・それは知らなかったわ・・・」

『それは』という言葉に僚は嫌な予感がした。

・・・が今はそんなことは置いておくことにする。

「最初は掃除も料理もまったく出来なかった。 けどな周りの人たちが教えてくれたし、助けてくれた。 はやてちゃんの場合だってきつと助けてくれるのになんで頼ろつとしないんだ？」

「・・・え、だって人様に迷惑を掛けたくないし、それに私なんかが――」

はやての顔が暗くなり始める。

はやてが言葉を言い切る前に僚が言葉を遮る。

はやての頭に手を置き、優しく撫でた。

気持ちよいのかはやてはされるがままになっている。

「小学生がそんな難しいことを考えなくていいんだよ。むしろ迷惑をかけとけ」

「僚君もそうだったん？」

「ああ、俺も親にも友達も大勢の人に迷惑掛けたな・・・」

今になっても良い思い出になっている。

体調が悪いのに無理をして倒れたり。貧血気味ながらもマラソンをして倒れたり、泳ぎ過ぎて沈んだり・・・そして起きたらいつも母さんと裕未が泣きそうになりながら俺を看病してくれた事を・・・もう二度と戻ってこない二人の事を・・・

「だから、今度でいい。どんな些細なことでもいいから他人に助けてもらえ・・・」

「・・・うん、分かった・・・」

その言葉を聞くと僚ははやての頭から手を離す。

余程気持ちよかったのだろうか、はやては名残り惜しそくに僚の手を見ていた。

「さあ、話が終わったら腹減ったし、早く買い物して帰ろう」

「うん！・・・よし！」

はやては思いっきり車輪を漕いだ。

全力と言っても普通に走れば追いつく程度 speeds であり、はやては僚がもう追いついているだろうと横を向いても誰も居なかった。車椅子をまず止めて真後ろを見てみる。

「・・・」

そこには今にも倒れそうな僚がいた。

僚はふらつきそうになりながらも壁を支えにしながらはやてに追いつくように少し歩いていった。

急いではやては僚のもとに行くが今まで気がつかなかったが額には汗が滲み出ていた。

僚ははやてがいることに気がつく大丈夫だから・・・と小さく囁く。

「・・・やっぱり具合が悪かったんやね」

「ああ、ごめん・・・少し、休ませてくれないか？」

そう言うとは僚は車椅子に体重を乗せる。それでも車椅子はビクともしないのは流石だろう。

道の真ん中で休むのはどうかと思い二人は日陰のある所に移動する。ごめんな、迷惑掛けて・・・と僚が言ってきたるがはやては気にしない。

相変わらず僚の顔は顔色が悪い、どこか悪いんだろうか・・・。グツタリとしている僚をはやてはジツと見ながら考える。

今思えばこうして迷惑掛けられたのって、初めてなのかもしれない。石田先生はともかく、他の人はただ話す関係でしかなかった。無駄な心配を掛けないために・・・

それで良いと思っていた。どんなことでも他人を巻き込むのはいけないのだと・・・

自分だけ背負っていけばいいのだと・・・

けど、今はなんとなく僚の言っていたことが分かる気がした。

――はやてが一步成長した瞬間だった。

五話 【過去】その2（後書き）

ここで一つ質問したいと思います！

ズバリ！、【ファフナー RIGHT OF LEFT に出てくるプクはメスなのかオスなのか？】

知っている人がいたらどうか教えて下さい！お願いします！

そして、更新が遅れてすいません。学生の身ながらいろいろと忙しいのです。（みんな同じか・・・）

そろそろ話しが落ち着いてくるかな・・・
今回は難しかったわ。僚の喋り方とか、思考とか深く入っちゃって
なんか中途半端になったかも・・・

とうか感想を下さい！

六話 【変化する日常】

〽海鳴大学病院 診察室〽

時計の針は十二時を過ぎようとしていた。

だがそんな時間にも一室では一人の女性が紙一枚を片手に持ち憂鬱そうに眺めていた。

「――…ねえ、本当に…言わなくていいの…」

深刻そうに誰かを諭すように石田は呟くように問いかける。

それに答える者も居る筈も無く、寂しい静寂がこの空間を支配していた。

時間が過ぎていくにつれて空気が重くなっていく……

―――物語は少しずつ終焉に向かっている。

この前の買い物から僚ははやて家の家族の一員となった。

はやては僚の事を『お兄ちゃん』と呼ぶようになった。一人っ子だったはやてにとって兄弟というものは憧れだったそうだ……そして僚もはやてのことも妹のように接していた。

相変わらず僚も通院生活が続いている。石田先生からは最悪の事態に備えての半ば強制的だったが……

それでもはやてが治療費を出してくれ、家主であるはやてに頭が上がない僚であった。

僚が来て以来、ほとんど近所付き合いなかったが今ではとても良好な関係な築けている。

何事もない穏やかな日々、ただ過ぎていく日々を送っていた。

そんな日常を古めかしい一冊の本は二人を見つめていたのであった。

そして、そんな日常に変化が起きる――

〓六月三日〓

はやての誕生日前日。

僚とはやては明日の誕生日に必要な物を買に出かけていた。

明日は石田先生もはやてのお祝いにやって来ると言う事で大いにテンションが上がっているはやては食材に関わらず、クッキーやパーティーゲーム類などを大量に買っている。

そんなはやてを微笑ましく見守る僚。

僚もはやてとは違いある物を買っていた。小さな紙袋に包まれていて何が入っているか分からないがとても大切そうに懷に持っていた。

「・・・ちよつと、買い過ぎたかな」

「まあ、買った分色々と楽しめるからいいだろ・・・」

「いや、それにしたってこれは・・・ね？」

買い物が終わりに帰宅中。はやては苦笑しつつ後ろに掛けられた電動袋に向く。

それには僚も同意するしかなかった。

大量の袋がはやての車椅子に掛けられていた。それらは全てゲーム類であり、その他に食材は僚が抱えている。

「なにがともわれ、明日が楽しみやね」

「そうだな、明日の料理何作るか決めてるんだよな・・・？」

「フッフッフ、それは明日のお楽しみや！」

はやては自身満々に笑顔を浮かべている。

そんなはやての無垢な笑顔に僚も釣られて顔が綻ぶ。

そんな楽しい話をしていたらいつの間にかはやて家に到着し、時計の針は六時を過ぎていた。

二人で夕食を作りだす。流石に長年の経験からはやては無駄の無く食材を調理していく。

一方の僚もはやてには劣るもののテキパキと順調に野菜を切っている。

「ん？お兄ちゃん、どうしたん・・・？」

「・・・いや、なんでもない・・・」

若干の敗北感に襲われる僚であった。

ふと電話機がピコピコと点滅していた。

留守番メッセージが送られていたらしい。再生してみると石田先生からだった。

『留守番メッセージ。一件です……。ーもしもし、海鳴大学病院の石田です。っと明日ははてちゃんの誕生日です。明日の午前中にははてちゃん家に行けると思っています。それじゃあねーー……。メッセージは以上です』

「はて、午前中には石田先生が来るらしいぞ」

「ホンマ、そんならちゃんとアラームセットしとかんとな！」

早速、携帯にアラームをセットし始めるはてであった。

夕食も終わりはてがゲームをしたいと言ってきたので付き合うことにした僚。

はては正四角形の箱のようなゲーム機を起動する。テレビ画面に映ったのは『大乱闘スマッシュブラザーズ』と映っていた。はてが使用するキャラは赤い帽子にヒゲを生やしたおじさん。対する僚は銃を持った青い鳥人。

「ちよつ、お兄ちゃん、メテオは卑怯や！」

「何言ってるんだはて！このキャラはこれが取り柄なんだよ！」

「っなら、これならどうや！」

ワイワイ、キャツキャ騒ぎながらゲームに没頭していると時計は十時になるうとしていた。

流石にこれ以上騒ぐと近所迷惑になり、なにより明日は石田先生が午前から来るので夜更かしする訳にはいかなかった。

僚ははやてをおんぶして二階に上がる。

残念ながら二人は別室である。僚がはやての部屋のベットのの上に座らせる。

「それじゃあはやて。おやすみ・・・」

「うん！おやすみ」

腕をブンブン振るはやてに僚は少し手を上げてはやての部屋から出た。

僚も自分の部屋である一室に入る。

相変わらず殺風景な部屋だった。自分でもそう感じてしまう。

主にあるとしても端っこに布団が畳まれており、その近くに歴史に関する書物が積まれていた。

あとは何も使われていない机ぐらいだろう。

布団の中に潜り、いつもと変わらず歴史の出来事を探る。

次の書物を取ろうとした時にふとその書物の上に乗っている指輪が目に入る。

僚はその指輪を手に取り、ジッと眺めていた。

何故自分がこの指輪を持っているのか。だがなぜなんだろう・・・初めてこの指輪を見た時に初めてみた気がなかった。なぜだろう・・・

この指輪をつける時怖いんだろう・・・
これじゃあまるでーーーーー

ーーーーッドク！

急に僚の胸の中が熱くなる。

肝臓の影響かと思ったが締め付けられるような痛みは無かった。
不意にはやての顔が思い浮かぶ。まるで何かに惹きつけられるよう
だった・・・

指輪をポケットの中に入れて、僚は部屋を出る。

急いではやての部屋の前まで行くと急に紫色の光が部屋から漏れ
ていた。

ゆっくりと部屋を開けるとそこには四人の男女と気絶したはやて
がいた。

そして誰も僚のポケットの中にある指輪が輝いている事に気づか
なかった・・・

六話 【変化する日常】（後書き）

やっとここまできたZ E・・・！本編の開始です！

すいません、最近趣味が増えてしまつて・・・リリカルなのはのMAD造りや、P S 3のアドホックパーティーでモンハンやら、絵を描くとかで小説を描ける暇が少なかったです！すいません！（汗）

作品を作る達成感がたまりませんね！それに加えて好評ならまたデシヨンが・・・！

モンハン誰かやってないかな？

頑張りますので色々と応援して下さい！

感想・誤字・脱字・アドバイス。バンバン送ってください・・・

七話 【ヴォルケンリッター】

「はやての部屋」

「どうなってるんだ・・・」

いきなりの事で動揺している僚だが改めて四人の男女を観察して見る。

四人の足元の床には紫色の変な模様？がクルクルと廻っている。春先とはいえまだ寒いのに薄そうな真つ黒な服装をしている。見方によっては・・・いや、完璧に変な四人組であった。

「なんなの・・・これ・・・」

不意に僚の後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

振り向いてみると、そこには呆然といている石田先生が佇んでいた。

足元には落としたと思われるクラッカーが、手元には小さな紙袋を・・・

僚と同じようにこの状況をみて動揺しているようだ

「先生・・・なんで此処に？」

「今そんなことどうでもいいの！ それよりはやてちゃんを・・・」

僚が石田に問いかけたが石田は怪し過ぎる四人をみて、はやてに危害を加えると思ったのだろう。

それに四人組の一人。赤毛の子供がはやてに近づいていた。

「……………！？」

僚も心配してはやてに近寄ろうとした瞬間、突如首筋に冷たい感触がした。

ピンク色の髪的女性が僚の首に剣を突き出していた。

「貴様ら、何者だ・・・」

冷たく若干殺気を籠った声だった。

少しずつ剣が僚の首に喰い込んでいく。そして――

「待って！シグナム」

金髪の女性がピンク色の髪的女性――シグナムを呼び止める。

金髪の女性とシグナムの間に数秒の静寂の後、シグナムは僚達に問いかける。

「お前達、病院はどこにある・・・」

「誰か具合でも悪いの・・・？」

石田先生が応える。

四人ともどこも具合が悪そうには診えない。

犬耳が生えている男性がはやてを護るように立っているせいではやての様子はまいち分からない。

思えば、ずっとはやてが動いていないように感じた。

「もしかして、はやてちゃんになにかあったの・・・？」

「貴様は・・・」

「私は医師です」

「・・・それを証明する物は？」

「——無いわ！」

キツパリと宣言する石田にシグナムは顔を顰める。

シグナムは僚に突き出していた剣を石田に向ける。

それでも石田は動揺する事なく真っ直ぐとシグナムに向かい合う。

そしてシグナムはそんな石田の瞳を覗き込む見つめる。
まるで心中を見通すかのように、空間が止まったかのように二人は睨み合っていた。

「――分かった。主を診てやってくれ」

「・・・ありがとう。はやてちゃんを病院に連れて行くわ、いいわね？」

石田が指示し、僚にはやてを運ばせるように指示する。
シグナムを含めた四人組も素直に指示を聞いていた。
救急車を呼び、後は待つだけである。軽く診察してみてもただ気絶している様であった。

僚ははやてをソファーに寝かす。その後ただ立っていただけのシグナム達だったが不意にシグナムが僚に話しかける。

「そういえば、貴様が何者が聞いていなかったな・・・」

さつきとは違い剣は持っていないがそれでも僚は命の危険を感じ

た。

「俺はただのはやての兄だ」

「・・・・・・・・」

僚がお兄さん宣言した直後シグナム含めた四人は急に深々と土下座した。

突然のことで僚は固まってしまった。

「——これまでの数々のご無礼、お許し下さい！」

「・・・いや、別にいいんだけどさ。 なんてはやての部屋にいたんだ？」

「そのお話は主が目覚ましてからにして貰えますか？」

「ああ、別にいいが・・・なんてはやての事を主って言うてるんだ？」

会話をしていると徐々に救急車のサイレンが近づいて来ている。

僚ははやてを抱っこして、玄関まで運ぶ。

犬耳の男性――ザフィーラが運ぶのを手伝おうと言ったが僚はそれを拒んだ。

彼女らを敵意している訳ではない。

もしかするかもしれない真実。謎の四人。

様々な事が突如に起こってしまつて僚の頭の中が真っ白になっていた。

ただこの子——はやてだけは自分が護らないといけない。それだけが僚の中にはあつた。

だが——、

「お兄様、私達は決して貴方達を危害を加えません。我ら『ヴォルケンリッター』！主はやてを御守りする守護騎士です。どうかこれだけは忘れないで下さい・・・」

この言葉に僚はとても温かく、そして心強いと感じた・・・

——…こうして、A、Sの物語が始まった。

七話 「ヴォルケンリッター」(後書き)

A' S 始まりました！ 更新が止まらないように頑張りたいと思います。 プロットどりにするのが中々難しいなあゝ・・・(汗)
いろいろなアニメとクロスオーバーしたいなあゝ(キラキラ)
誤字や脱字等が沢山あるだろうなゝ 感想お願いします！

八話 【病室での…】

〳海鳴大学病院〵

「――…っん、…あ、れ？」

はやては日の明かりで目を覚ますとそこには知らない天井が――
―訂正、見慣れた天井が目の前に映っていた。
ここが自分の家ではなく、まじれもなく通い続けている病院だと
すぐに気づく。

今も若干寝ぼけながらも上半身を起こし辺りを見回して見るとデ
ジタル時計を発見。

そこには――

『六月三日 金曜日 AM 11:38』

最悪の誕生日になってしまった…とはやては頭を抱える。

石田先生の約束を守れず、楽しくなるはずだったはずの誕生日会が自分のせいでこんなことに……

徐々に目の奥から何か込み上げて来る。

そんな時、不意に寝息が聞こえた。

今まで気がつかなかったがそこには椅子に座りながらスヤスヤと眠り込んでいる僚の姿だった。

そんな僚の寝顔にはやての顔が自然と綻ぶ。

——いや、まだ午前中でまだ間に合う！ 今から病院から出て石田先生と僚お兄ちゃん楽しんで楽しい誕生日会を——

「——あれ？ ……わたし、なんで……」

病院にいるんだろうか……とはやては腕組みをしながら唸る。

何か大事な事を忘れているような、……まるで霧が掛かったかのよう
に昨日の記憶が曖昧になっているようだった。

「（……えーと、昨日は……僚お兄ちゃんと買い物に行つて）」

『—————』

はやては目を瞑りながら昨日の事を思い出していく。
すると、どこからか空中になにかいる感じがいた。
まるで蚊やハエらが飛び回っているような感覚だった。
そんなことに構っている余裕がないはやては当然ながら無視をし
改めて昨日の事を思い出していく。

「（…と…その後に二人で料理したり——）」

『———』

声とも音とも言えないものが聴こえる。
まるで自分と呼んでいるかのように……

「（…それで、ゲームして…）」

『———』

「（——あと、えっと。夜遅うなったから寝室に行つて…）」

『———』

「ああ！…もう、鬱陶しいッ！」

あまりの鬱陶しさにはやては空中にいる虫か何かを振り払うように腕をブンブンと振り回す。

——
ットン…

「……………えっ？」

すると、手の甲に何かが当たった。
硬い物に当たったような音だった。虫等であろうと思っていたもののだから突然の事で動揺してしまう。
虫から得体の知れない物への恐怖からはやては昨日の記憶を思い出すのをやめて、そっと…目を開けた。

『——、——……！』

そこには…はやての周りをフワフワと浮かんだ一冊の本だった。

「——…どうやら、闇の書が動き始めたようだ…」

八話 【病室での…】（後書き）

どうも短くてすみません…。。

学校が始まって、そして高三になりました！

受験等で中々書ける時間が無いのです。

まあ暇になる授業の合間にチヨクチヨク、プリントの裏に書いてますw

上手く出来てなかったように思えます…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2410k/>

リリカルなのはA'S ~RIGHT OF LEFT（去り行く者達の権利）~

2010年10月9日20時56分発行